



遥かな国の冒険譚

光り姫

雪村月路

幼いころに、静養のための城で、一度だけ妖精の姿を見たことを、フィリシア姫はその後もちゃんと覚えていた。

妖精たちが、月の光で作った首飾りを自分にかけてくれたことも、その結果、自分の病が瞬時に癒えたことも、とうてい忘れることのできない強烈な体験だった。

城には、静養の必要がなくなったあともよく訪れたが、あれ以来、妖精の姿を見ることはなく、月日は流れ、青い髪の姫君は幼さを残しながらも、次第に娘らしく成長していた。

その夏も、フィリシアは静養の城に滞在していた。

ある夜、夢の中で、妖精たちの声を聞いたように思った。

「お久しぶりです、フィリシアさま」

「時が満ちました、フィリシアさま」

「明日の午後、お迎えにあがります」

「ミルクをひと匙、はちみつをひと匙、ワインをひと匙用意してお待ちくださいね」

翌朝、目を覚ましたフィリシアは、言われたとおり、ミルクをひと匙、はちみつをひと匙、ワインをひと匙用意した。これがただの夢ではないと信じて。

いよいよ午後になった。

突然、ぱたりと周りの時間が止まったかのように、特別に静かな時間が訪れた。

フィリシアがドキドキしながら待っていると、部屋の中で、小さな声がした。

「フィリシアさま、私達の姿が見えますか」

声のするあたりを眺めてから、ぐるりと部屋を見回して、もう一度よくよく見たあとに、フィリシアは悲しそうに言った。

「いいえ、見えないわ」

「悲しまないで。もうそういうお年なのです」

「でも」

「大丈夫。ほんの少しの間、魔法の力で見えるようにします。このミルクとはちみつとワインに・・・」

その言葉とともに、何かの滴が垂らされたように、それぞれの液体が揺れた。

「・・・さあ、これでよし。全部舐めてくださいな」

フィリシアは言われたとおりに、ミルクとはちみつとワインを舐めた。すると、部屋の中にぼんやりと漂う、いくつかの小さな人影を見分けられるようになった。透き通った羽を震わせ、ふわふわと浮いている。

「ああ、妖精さん！ 見えるわ！」

「よかった、魔法が効きましたね。では、参りましょう」

「どこへ？」

「まずは、湖へ」

城を取り巻く緑を抜けると、さほど遠くないところに丘があり、丘を下ると湖がある。以前、ばあやと一緒に遠足に来たことのある道を、フィリシアは妖精たちに導かれて歩いた。なぜか誰にも出会わない。

道すがら、妖精たちはフィリシアに話した。

「私たち、フィリシアさまにお願いがあるのです」

「フィリシアさまのお年を数えて待っていました」

「光り姫さまのご友人になって差し上げてほしいのです」

光り姫さま。たしか、小さい頃にもらった光の首飾りは、本当はそのひとのためのものだった。

「光り姫さまって、どんな方？」

訊くと、妖精たちは口々に答えた。

「お優しい方」「お可愛らしい方」「お淋しい方」

それなら友達になれるかもしれない、とフィリシアは思った。妖精たちは補足して、

「元は人間でいらしたのに、人間のお友達がいらっしやらないのです」

「人間の目に触れてはならないきまりがあるのです」

「選ばれた人間とだけ、お会いできるのです」

「私、選ばれたの？」

フィリシアは尋ねた。妖精たちは、少し緊張した声で答えた。

「いいえ、まだ」

「でも、私たち、フィリシアさまが選ばれると信じています」

「選ぶのは、剣なのです。これからご案内します」

話しているうちに、湖についた。岸には、小舟が一艘、夏の風に揺れていた。

「どうぞお乗りください」

言われて乗り込むと、ひとりでに動き出す。

湖の真ん中の浮島で、小舟は止まった。

「どうぞお降りください」

言われて降りると、浮島には、小さな石造りの祠があった。きっと、この中に。

果たして、フィリシアが祠を開けると、中の台の上には、燦然と輝く黄金の剣が、鞘に収まった状態で乗っていた。柄の部分には、深い青色をした宝石が嵌め込まれている。

「どうぞ剣を抜いてください」

妖精たちが、さやさやと囁きかける。フィリシアは剣を持ち上げた。見た目よりも、ずっと軽くて、子供のフィリシアでも容易に扱える。装飾用の剣なのかもしれない。

鞘と柄を持って、思い切って引き抜くと、剣はすらりと抜けた。刀身も金色だった。

妖精たちは、わっと喜びに沸いた。

「抜けたわ！ ああ、やっぱり！」

「フィリシアさまは、剣に選ばれました！」

「光り姫さまに会って差し上げてください。どんなにお喜びになるでしょう！」

フィリシアは、導かれるまま、剣を鞘に収めて手に持ち、小舟に戻った。

小舟は再び、ひとりで動き出し、さっきとは違う岸辺に寄りついた。

岸辺には白い花がたくさん咲いていて、そこに、編みかけの花冠が置いてあるのがフィリシアの目に止まった。

そっと拾い上げたフィリシアに、妖精たちは微笑んだ。

「光り姫さまが編んでいたのだと思います」

「新しいご友人のために。初めてのご友人のために」

「剣を抜いて、ここに置いてください、フィリシアさま」

フィリシアが言われたとおりにすると、妖精たちは呼ばわった。

「光り姫さま。光り姫さま！」

「どうぞおいでください」

「フィリシアさまがお待ちですよ」

すると、背後でさらさらと時の砂が流れるような感覚があって、フィリシアははっとして振り向いた。

が、誰もいなかった。ぐるりと見回したが、やっぱり誰もいなかった。

妖精たちを見ると、困ったような顔をしていた。

「いま、一瞬おいでになったのですが」

「緊張して逃げてしまわれました」

「どうしましょう、きっと近くにいらっしゃると思うのですが」

「・・・探しましょう！」

フィリシアは言った。光り姫に会ってみたい気持ちが強くなっていた。妖精たちから慕われている、やさしい光り姫。緊張して逃げてしまった光り姫。花冠を編んでくれた光り姫に。

フィリシアと妖精たちは、呼ばわりながら岸辺を歩いた。

「光り姫さま。光り姫さま」

「どうか出て来ててください」

「フィリシアさまがお待ちですよ」

「そうよ。私に花冠、編んでくださいな」

歩いているうちに、小さな洞窟があった。その陰から、白いドレスの裾がのぞいているのを、フィリシアが見つけた。

妖精たちに、シーツと言って、フィリシアは話しかけた。

「こんにちは、光り姫さま。フィリシアと申します。私」

ドキドキしながら、息を吸って、相手に届けと想いをこめて言った。

「私、あなたのお友達になりに来ました！」

白いドレスの裾が、ふわっと揺れた。それから・・・おずおずと、本当におずおずと、岩陰から、その人が出て来た。白い肌、金色の髪、金色の瞳、薔薇色の唇。光り姫の名の通り、輝くような美しさだった。フィリシアよりいくつかが年上に見えるが、ひどく緊張しているようだ。その唇が開いて、かすかに震える声が告げた。

「こんにちは。私の名はミルガレーテ。お会いできて嬉しいです」

それが、フィリシアと、＜光り姫＞ミルガレーテとの出会いだった。

今度は逃げませんように、と思いながら、フィリシアはにっこり笑って手を差し出した。

「手、つないで行きましょう、ミルガレーテ」

ミルガレーテはそうっと岩陰から離れて、フィリシアの手を取った。夏だというのに、指先のひんやりと冷えた手だった。

「さっき見たわ。私に花冠、編んでくださるの？」

尋ねてみると、こくんとうなずく。見た目はフィリシアより大人で背も高いのに、まるでフィリシアのほうが年上であるかのようだ。二人は手をつないだまま、白い花の咲く岸辺まで戻って来た。妖精たちも一緒だ。

ミルガレーテはフィリシアの手を離して、ふわりと座った。編みかけの花冠を手にとって、続きを編み始める。

フィリシアも、隣に座って、新しい花冠を編み始めた。ミルガレーテのために。

「できたわ、フィリシア」

「ちょっと待って・・・うん、私もできたわ」

二人はお互いに花冠をかぶせあった。目が合って、ミルガレーテは恥ずかしそうに微笑んだ。ああ良かった、笑ってくれた、とフィリシアは思う。なんて可愛らしく笑うお姫さまなのかしら。

「よく似合ってるわ、フィリシア」

「あなたもね、ミルガレーテ」

二人は少し打ちとけた気持ちになって、ぽつりぽつりとおしゃべりをした。それでフィリシアは、ミルガレーテについて、いくつかのことを知ることができた。

ミルガレーテが、古代レティカ王国の、最後の王の一人娘だったこと。

東方の反乱によって王が亡くなる直前に、妖精王のもとに預けられたこと。

その際、13本の宝剣に魔法がかけられ、世界中に散らばったこと。

13本の宝剣が再び一堂に会するとき、ミルガレーテも人の身に戻ることに。

フィリシアが手に入れた剣は、その宝剣のうち的一本であること。

「宝剣は、私の友達を選んでくれるの。これが最初の一本目」

と、ミルガレーテは黄金の剣の鞘を撫でながら言った。すでに剣は鞘の中に収められている。

「この柄の青い宝石の意味は、誓いと友情。私を呼び出せるのは、この最初の剣だけよ」

「呼び出すって？」

「もし・・・もし、フィリシアが私に会いたいと思ってくれることがあったらね。そうしたら、この剣を抜いて、私の名を呼んでくれればいいの。月が満ちて行く時期なら、それで私、あなたのもとに現れることができるわ」

「月が満ちて行く時期って？」

「新月を過ぎてから、満月までの間。それ以外のときは私、何もわからずに眠っていて、動くことができないから」

「勝手に呼び出したら、迷惑したりしない？」

「ぜんぜん迷惑なんかじゃないわ。うれしい・・・と思う」

「それなら、呼ぶわ。明日も、あさっても。また一緒に遊びましょう」

「ありがとう。待ってるわ」

ミルガレーテはにっこりと笑った。ああ良かった、また笑ってくれた。

妖精たちが、遠慮がちに声をかけて来た。

「光り姫さま、光り姫さま」

「なあに？」

「フィリシアさまの呪い、見てあげてください」

「呪い・・・」

ミルガレーテは真剣な顔つきになってフィリシアに向き直った。フィリシアは少しの間おののいた。呪われた身で、友達になってはいけなかっただろうか。しかし、とがめられる気配はなかった。

「妖精たちから聞いているわ。強力な呪いがかけられているとか」

「私、よくわからないの。お父様もお母様も、教えてくださらなくて」

「見てみるわ。私、少し解呪の呪文が使えるの。両手を出して」

フィリシアが両手を出すと、ミルガレーテはその手を取った。

「しばらく、静かにしていてね」

そう言うと、柔らかな声で、魔法の呪文を唱えだす。フィリシアの周りに、ポウツと白い輪が浮かび上がり、複雑な模様を刻んでいく。

ミルガレーテの声が、少し緊張して来た。フィリシアの周りに、二重目の輪が浮かび上がり、複雑な模様を刻んでいく。

ミルガレーテの声が、苦しげになって来た。フィリシアの周りに、三重目の輪が浮かび上がったが、

「あっ」

短い悲鳴とともに、三つの輪はカツと光ってかき消えてしまった。

ミルガレーテは荒い息をしている。顔色が真っ青だ。

「大丈夫、ミルガレーテ」

「ごめんなさい、解呪できなかった！」

ミルガレーテの目には、みるみるうちに涙が盛り上がって来た。

「ごめんなさい、フィリシア。せっかくお友達になってもらったのに、私、何もしてあげられなくて」

「呪いは解けなくても、やってみてくれたことだけで、私、すごくうれしいわ」

フィリシアは本心から言った。

「呪いの中身はわかるの、ミルガレーテ」

「ええ、わかったわ。自分の国に・・・いられなくなるのよ」

ミルガレーテは口ごもりながら、そう言った。それから、はっきりした口調で、
「たぶん、フィリシアはそのうち、旅に出ることになると思うわ」

「旅に？」

そう聞いて、フィリシアの胸のうちに湧きあがったのは、しかし、おそれや不安ではなく、何かもっと、未知への期待に近いものだった。

「フィリシアがいやでなければ、私も一緒に行くわ」

「ありがとう。きっと一緒よ」

話しながら、気がつけば、日が傾きかけている。

「今日はもう帰りましょう、ミルガレーテ。ちゃんと休んでね。明日、きっと呼ぶから」

「きっとよ、フィリシア」

二人の姫君は、すでに友情で結ばれていた。

幾年かののち、解呪の聖泉へと旅立つとき、フィリシア姫の荷物の中には、金色の宝剣がしっかりと収められることになる。

(完)

光り姫

<http://p.booklog.jp/book/96386>

著者: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/96386>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/96386>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブックログ